



始



7

ズン館

世界お伽新(9)

雪姫

附猿の

お伽

大波著



27/5

版藏館文傳京東

持104
834

緒言

世界お伽噺第九編

芬蘭土

雪

姫

附 猿の失敗

グリム氏のお伽噺にある、「リットル、ス
ノーホワイト。」を、「雪姫」と題して本書に

3. 3. 28



それと同時に死んで居た雪姫は口から黒血と一所に林檎を吐き出し
 ました。静かに蓋をあけて櫃から出て来た。

紹介致しました。
 筋わ皆様にもく様に、余程加減を致しま
 した。



世界お伽噺

お伽俱樂部著

第九編

雪

雪

姫

むかし、芬蘭フィンランドに一人の女王女王が居りました。所ところが不幸不幸にも一人の赤兒赤い子を産うむと、直すぐ死いんでし
 姫ひめまいました。また其その赤兒赤い子わ雪ゆきの様に白しろい美うつ
 女をの子こで、名なわ雪ゆき姫ひめと云いいました。
 ・それから殆たいていど一年程いちねんほど過すぎて、王様おうさまわまた代かり

← 雪 姬 →



← 世 界 伽 嘶 →





世 界 お 伽 嘶

の女王を娶りました。

所が其女王わ、なかくの美人でありました
が、非常に片意地のある高慢な女で、常に自分
程容色の善い美しい女わ、世の中にないと思つ
て居りました。また其女王わ實に不思議な鏡を、
所持して居りました。而して一日の中幾度とな
く其鏡の前に立つて、

「ネ鏡！ 私の様に美しい女わ、

他に居ないでしよ？」

と、尋ねました。すると鏡わ女王に向つて、



雪 姫

と、答えました。

「美しい女王！ 貴女わ此國で、

一番美しい女で御座います！」

所が赤兒の雪姫わ次第に成長して、ますます
美しくなりました。而して七八つの頃になると、
女王よりも美しくなりました。或日女王わ鏡の
前に立つていつもの様に、

「ネ鏡！ 私の様に美しい女わ、

他に居ないでしよ？」

と、尋ねました。すると鏡わ、



世 界 お 御 噺

「オー女王！ 雪姫わ貴女よりも、
遙に美しくなりました！」

と、答えました。
女王わ之れを聞いて顔色を青くして怖れまし
た、而して忽ち嫉妬心を起して、幼い雪姫を手
酷く虐めました。

或日女王わ一人の獵師を呼んで、多分のお錢
を與えて、「雪姫を人知れぬ森え連れて行つて殺
して下さい！」而して殺した證據に、雪姫の生
肝を持つて來て下さい！」と、容易ならん事を



頼みました。其所で獵師わ雪姫を森え連れて行
つて、無慈悲にも殺そうと致しました。

雪姫わ大に驚いて泣き、「獵師様！ 何卒
命丈わ助けて下さい！」其代りモウ繼母の所え
雪わ歸りません。」と、云つて獵師に只管願いまし

た。すると獵師も遂に、哀れに思つて、「ジャ助
けて上げよう！ 其代りモウ宮殿え歸つてわな
りませんぞ！」と、云つて、丁度其所を駈けて
通る子鹿を射ち止めて、其生肝を持つて宮殿え
歸り、雪姫の生肝だと偽つて女王に差上りました。



可哀そうに雪姫わ、寂しい森の中に唯一人と
 世なつて、泣けど叫べど誰あつて、助けに来る者
 界とてもありませんでした。其所で止むなく、か
 お弱い足の續く限り岩に登り谷を越えて、漸く夕
 伽方頃小さい家を見付けて其所え入りました。所
 嘶が不思議にも其家わ、何から何まで小さくあり
 ました、が、話にも云えない程奇麗に、室内を
 飾つてありました。而して真中に奇麗な食卓が
 あつて、其上に甘い御馳走の入つておる、七
 つの小さい皿がありました。其側に小さい匙や



肉又や小刀を添えてありました。而して又お酒
 の入つておる七つのコップがありました。それか
 ら又壁の方にわ七つの小さい寢臺が、一列に並
 べてありました。

雪

雪姫わ丁度その時、お腹が空いて居たので、
 皿の御馳走を少しづつ喰べて、寢臺に寝てしま
 いました。

姫

それから全く暗くなると、此家の主人等わ山
 から歸つて來ました。彼等わ皆身の丈一尺五六
 寸位の、莊嚴しい七人の武士でありました。

← 姫 雪 →



十一

← 漸 伽 世 界 世 →



十



十二
 彼等わ室え入ると直ぐ、七本の小さい蠟燭を
 世點火しました。其所で室内わ一時に、晝の様に
 界明くなりました。すると彼等わ忽ち、誰か此所
 おえ入つて來た事を知つて各自に、「誰か僕の椅子
 に腰かけた様だ！」「誰か僕の御馳走を少し喰べ
 た様だ！」「誰か僕の麴包を喰べた様だ！」「誰か
 僕の野菜物を喰べた様だ！」「誰か僕の酒を飲ん
 だ様だ！」「誰か僕の小刀を使つた様だ！」「誰か
 僕の肉叉を使つた様だ！」と、云いながら室内
 を見まわしました。而して雪姫の寢て居る寢臺



十三
 雪
 に眼をつけて、彼等一同手にく蠟燭を持つて
 寢臺に近き、雪姫のスヤ／＼と寢て居る寢顔を
 見て、「オーなんと美しい少女だ！」と、彼等わ
 皆喜びました。而して起さないで其夜わ其まゝ
 寢かして置きました。
 翌朝雪姫わ眼を覺まして、小さい七人の武士
 を見るや非常に驚きました。然し彼等わ優しく
 雪姫に向つて、「少女！お前の名わ何と云うの
 です？」と、尋ねました。雪姫わ、「私わ雪姫と
 申します！」と、答えました。すると彼等わま



世 界 お 伽 嘶

た、「ナゼお前わ僕等の家え來たんです？」と、
 續いて尋ねました。
 其所で雪姫わ彼等に向つて、繼母に虐められ、
 た事だの、獵師に殺されようとして、漸く命丈
 を助けて貰つた事だの、而して此所まで來るに
 わ全一日駆けずり廻つて、荊棘に足を刺された
 り、岩角に手を摺り剝いたりなどして、來た事
 を詳しく語りました。彼等わ之を聞いて氣の毒
 に思い厚く雪姫を慰めて、「それでわお前わいつ
 までも此所に、居てくれる事が出來ませんか、



雪 姫

そうすりや之れからさき、決してお前に不自由
 をさせる様な事わない！」と、皆一同して雪姫
 に願いました。
 すると雪姫わ、「そう致しましよ！」と、心善
 く聞いてくれたので、彼等わ大變喜び毎朝早く
 山へ行つて、夕方家え歸つて來ました。斯くし
 て雪姫わ晝間わ唯一人残つて、家の用事をして
 居りました。其所で彼等わ毎朝家を出る時に雪
 姫に向つて、近い中に女王わお前の此所に居る
 事を知つて、訪ねて來るから決して家え入れて



世 界 お 伽 嘶

わいりません！」と、能く注意して置きました。話變つて女王わ獵師に願んで、雪姫をなきものにしたので、今じゃ元の通り自分わ一番美しい女だと思つて、いつもの様に鏡の前に立つて、

「ネ鏡！ 私の様に美しい女わ、

他に居ないでしよ？」

と、尋ねました。鏡わ、

「オー女王！ 貴女わ奇麗です！

然し今森に住む雪姫に比ぶると、

はるかに劣ります！」



雪

と、答えました。

之れを聞いて女王わ打ち驚き、さてわ獵師に欺かれたかと残念に思いました。而して何うにかして雪姫をなきものにし様と、いろく方法を考えて居りました。

姫

其所で遂に女王わ老婆様の姿をして、少しばかりのリボンを持つて、山を越え谷を渡つてようくの思いで、雪姫の居る所え訪ねて來ました。而して入口の戸を叩きながら、「リボンわ如何です？ お安く願います！」と、云いまし



世 界 お 伽 嘶

た。雪姫わ窓から窺いて見ると一人の、身窄ら
 しいお老婆様でありましたから、女王など、わ
 少しも氣付かず、戸をあけて家え入れました。
 すると其お老婆様わ家え入るや否や、鋭い聲
 で、「雪姫！ 能くも今まで無事で居ましたね！
 時にマー何んと汚い頭なこと！ この美しいリ
 ボンで結んで上ましょ！」と、云いました。
 雪姫わ何の氣なしに後をむくと、女王わリボ
 ンを以て強く雪姫の咽喉を締めました。可哀そ
 うに雪姫わ息が詰まつて、ドツと床の上に倒れ



雪

ました。女王わ其様を見て、うすきびの悪い笑
 顔をして、出て行つてしまいました。

間もなく夕方になると、七人の武士等が歸つ
 て来て、床の上に倒れておる雪姫を見て、大に
 驚き抱き起して見ると、もう死んだもの、様に
 息も止つて居りました。彼等わ急いで咽喉のり
 ボンを解いて、いろく介抱をすると、幸にも
 雪姫わ次第に息を吹き返して、遂に元の身体と
 なりました。其所で彼等わ雪姫に詳しく事の有
 様を聞いて、「それじゃ女王に違いない、之れか





世 界 お 伽 嘶

ら先き何んな者が訪ねて来ても、必ず家え入れ
てわなりませんよ！」と、堅く云い付けて、又
翌朝出て行きました。
話變つて女王わ宮殿え歸るや否や、鏡の前に
立つて、

「ネ鏡！ 私の様に美しい女わ、

他に居ないでしよ？」

と、尋ねました。すると鏡わ前の様に、

「オー女王！ 貴女わ奇麗です！

然し今森に住む雪姫に比ぶると、

はるかに劣ります！」



雪

姫

と、答えました。

女王わ此言葉を聞いたとき、満身を慄わして
ギリ／＼と齒をくいしばり、「憎くき雪姫！ も
う用捨わならん。」と、毒な木で櫛を作え、其を
持て姿を變て、又雪姫のおる所え行きました。
而して戸を叩きながら、「モンお安い櫛をお買
い下さい！」と、云つて其櫛を窓の方え出して
見せました。雪姫わ窓より窺いて見ると、奇麗
な櫛でありましたから、急に欲しくなつて、戸

をあけて入れました。

世 女王の家に入ると、わざく柔和しい言葉つ

きて、「私が此櫛で髪を梳いて上げましょー！」と、

お 云つて雪姫の頭に手をかけました。

倂 すると雪姫の頭に櫛が觸るや否や、またも雪

嘶 姫わ其所に倒れてしまいました。女王わ其容子

を見て、もう大丈夫と思つて、急いで逃げて行

きました。

それから間もなく、七人の武士等が歸つて來

て、雪姫の倒れて居るのを見るや、早くも女王



の仕業と見ぬいて、急ぎ雪姫を抱き起して身体

の怪我を檢めると、髪の毛から毒の櫛が出ました。

其所で彼等わいろくと、手當を施しました。

すると又幸にも雪姫わ、漸く蘇生致しました。

而して又翌朝彼等が山え行く時に、能く雪姫に

注意をして出て行きました。

話變つて女王わ飛ぶ様にして、急いで宮殿え

歸るや直ぐ鏡の前に立つて、

「ネ鏡！ 私の様に美しい女わ、

他に居ないでしょ？」

姫

雪



世 界 お 伽 漸

と、尋ねました。すると鏡わ矢張り前の様に、

「オー女王！ 貴女わ奇麗です！」

然し今森に住む雪姫に比ぶると、

はるかに劣ります！」

と、答えました。


女王わ之れを聞いて、また血相を変えて眼を怒らし、「こんだこそわきつと、殺してしまわなきやならん。」と、直ぐ一室に閉ぢ籠つて、いろいろ考えたのち、奇麗な林檎の片かわに、恐ろしい毒薬を詰めて、百姓女の様に姿を変えて、




雪

姫

雪姫の所え来ました。而して女王わ戸を叩くと、雪姫わ窓から首を出して、「誠にお氣の毒ですが、誰もお入れ申す事わ出来ないます！」「イヤ決して私わ怪しい者でわありません、この近くに住む百姓女で御座います、時に貴嬢に林檎を一個差上ましょー」「イエ私頂きませんの！」「デモ決して毒なものじゃありません、それじゃ半分わ私が頂いて、半分丈貴嬢に差上ますから、召し上がって下さい！」と、云つて女王わ衣囊から小刀を出して、林檎を半分に切つて、毒薬の

← 姬 雪 → 



 → 斯伽お界世





世 界 お 伽 嘶

詰めてある方を雪姫に與えて、毒藥の入いらぬ
方を自分が取つて、喰べ始めました。

雪姫わ其を見て深い企のあるとも知らず、疑
を晴らして毒の入つた林檎を喰べました。する
と忽ち骨の節々に痛を感じ、血を吐いて其所に
倒れてしまいました。

女王わ雪姫の吐血して倒れたのを見て、大變
喜び之れならもう生き還る様な心配がないと、
其儘急いで宮殿え逃げ歸り鏡の前に立つて、

「ネ鏡！ 私の様に美しい女王、

他に居ないでしょ？」

と、尋ねました。鏡わ其に答えて、

「美しい女王！ 貴女王此國で、

一番美しい女で御座います！」

と、云いました。其所で女王わ始めて安心致し
ました。

話變つて七人の武士等わ、夕方頃山から歸る
と、また雪姫わ血を吐いて倒れて居たので、彼
等わ喫驚して、いろく手當を致しました。が、
何うしても生き還りませんので、遂に彼等わ雪
姫



雪

姫



世 界 お 伽 嘶

姫の死骸を棺に入れて、三日の間其まわりに哭いて居りました。

それからいよく埋め様と致しましたが、其死骸わまるで生きて居る人の様でありました。殊に頬などわ赤薔薇の様に美しく、何うしても死んだものと思われないので、埋める事わ出来ませんでした。

其所で其死骸を草を編んで作えた棺に入れかえて、其横に名わ雪姫と云つて、立派なお姫様である云う事を、詳しく金文字で書、こ氏と



張りつけて、一人く交代に其棺の側に番をして居りました。其後十年間わそんな風にして過ぎました。

雪と同じ様に年をとつて、だんく大きくなり、顔わますます美しくなりました。

所が或日一人の王子が二三人の従僕と一所に、森の中にて道を踏み迷い、偶然にも七人の武士等の住家え訪ねて來ました。而して草で編んだ棺の中に横わつておる雪姫を見て、七人の武士



世 界 お 伽 嘶

三十四

に向い、「皆様！ 何卒この雪姫を僕に下さい！
 其代り皆様の好きなものわ、なんても差上ます
 ！」と、頼みました。すると七人の武士等わ、
 「何を貰つても之れ丈わ差上げる事わ出来ません
 と、王子に向つて謝絶りました。
 所が王子わ其にもかゝわらず頻に頼むので、
 遂に七人の武士等も氣の毒に思つて、雪姫の死
 骸を棺と一所に與えました。
 其所で王子わ七人の武士等に、厚く御禮をの
 べた後、從僕に云い付けて棺を擔がせ様と致し



雪 姫

三十五

ました。すると忽ち一人の美しい女神が天降つ
 て、雪姫の横わつておる棺に手をかけて、蓋を
 あけたかと思ふとすぐ消えてしまいました。
 それと同時に死んで居た雪姫わ口から、黒血
 と一所に林檎を吐き出しました。而して靜に蓋
 をあけて棺から出で來ました。
 すると王子わツカくと、雪姫の側に進み寄
 つて堅く抱きしめました。
 それから雪姫わ王子に従つて、無事に宮殿え
 歸り、王様の許しを得て、いよく吉日を選ん

← 姬 雪 →



↔ 嘶 伽 也 界 世 →



で、立派な結婚式を挙げる事となりました。
所が雪姫を酷く苦しめた女王わ、其結婚式に
招かれたので、服装を立派に着飾つて鏡の前に
立ち、

「ネ鏡！ 私の様に美しい女王わ、

他に居ないでしよ？」

と、尋ねました。すると鏡わ直ぐ其に答えて、

「オー女王！ 今迄貴女王わ、

奇麗で御座いましたすが、

いま貴女よりも美しい、



女王が一人現れました。」

と、云いました。

女王わ之れを聞いて急ち嫉妬心を起して、結

婚式えも行くまいと思いましたが、また思い直

して出掛けて行きました。而して式場え入ると

死んだと思つた雪姫に出會い、余りの意外に驚

いて、呆然り突立つて視めて居りました。

姫 そうこうしておる中に、雪姫を苦しめた罪が

知れて、直ぐ其場に於て王子の手にかゝつて、

斬殺されてしまいました。





世 界 お 伽 嘶

其所で雪姫わ目出度く王子と結婚して、美しい女王となりました。

四十

めでたし！

めでたし！

世界お伽嘶第九編 おわり



世界お伽嘶附録

猿の失敗

お伽倶楽部著

猿の昔ある山奥に恐しい程我慢強い、大きな猿が一匹居りましたが、よつぼど性質のよくない奴で、同じ山奥に居る、虎や猪や狼のやうな強い者の前へでれば、真赤な顔を真青にして、長い尻尾も短くして、がた／＼慄えて居るが、兎や貉や狐のやうな弱い者の前へ出れば、横筋のあ

四十一



世 振り上げて、
 界 俺ほど利巧で偉い者はない
 お など、人も無氣の振舞して、意張り散すので
 伽 ありませんた。
 漸 所が此奥山に一筋の小川があつて、其所に一
 匹の川獺が棲んで居りましたか、いつも兎や貉
 が、猿に虐められて居るのを見て、氣の毒に思
 ひ、奈何して其敵打をして、遣りたいものだと
 ばかり思つて居りました。



すると程なく寒い冬になつて、草木は枯
 れて雪で埋まり廣い奥山にも喫べる物とては一
 つもなくなつて了ひました。
 猿 さて此様に寒くなつても、平氣なものは川獺
 位なもので、奥山に居る獸類はみんな困つて居
 の りましたが、とりわけ困つて居るのは、平素か
 失 ら心掛けの悪い猿で、喫ものが少しも無くなつ
 ても用意の貯蓄はなく最早十日餘にもなるけれ
 敗 ど食物とては一口も口へはいれず、身体は瘦せ
 て骨と皮ばかり、大きくなるものは目ばかりで





世 界 お 伽 新

平素は強情我慢の猿ではあるが、すつかり弱り
きつて、干乾になるのを今日か明日か、穴に
愁然しやがんで待つて居ると、是幸と腹に巧の
川獺が一匹、意勢よく飛んで来て、

「オイ猿！」

と、いへば、猿は不意の御客に驚いて、力無げ
に顔をもたげて見ると、今迄たゞの一度も交際
つた事もない川獺で、其が又憎らしい程意勢が
よいので、猿は又二度びつくり、

「オイ猿！ 俺は此下の小川に居る川獺だが、



猿 の 失 敗

今日は俺等の寒祭で、うんこ御馳走がある
のだが、生憎御客が一人もないので實はお
前を呼びに来たんだが、どうだ今から直ぐ
俺と一緒に行かないか！」

と云へば、猿は大喜びに喜んで、

「開いた口にぼた餅」

とは此處の事か、立たうとしたが、長い間の
よぎない断食で、立つことが出来ず、一人苛々
して居るこ、早くも其を悟つた川獺は、

「ヨシ来たどつこいしよ！……」

276
498

第十一編	第十編	第九編	第八編	第七編	第六編	第五編	第四編	第三編	第二編	第一編
願旃姉魔二雪金蓄大哀火黃少十 智檀妹法人羽羽薇膽れ打金の年の人 娘語女鈿弟姫鷹娘年女箱魚險子										
以下 順次 出版	第廿五編	第廿四編	第廿三編	第廿二編	第廿一編	第十九編	第十八編	第十七編	第十六編	第十五編
	兄と妹	二人孤兒	鳩鬼太郎	殺鬼太郎	忠婢モルギアナ	蛙國漫遊	王女の人性	薬の牡牛	象の牡牛	笛吹愚助
										臆病惡魔

世
界
お
伽
嘶

定價 各冊 金拾錢
郵稅 各冊 金二錢

大正三年二月廿日印刷
大正三年三月廿五日發行

不許複製
編輯者 お伽俱樂部
發行者 久保田長吉
印刷者 岩見米三郎
印刷所 精美堂
東京市淺草區左衛門町壹番地
賣捌所 博文館
振替東京一七一九九番
電話 浪花 三八一九番



世界お伽嘶附錄終

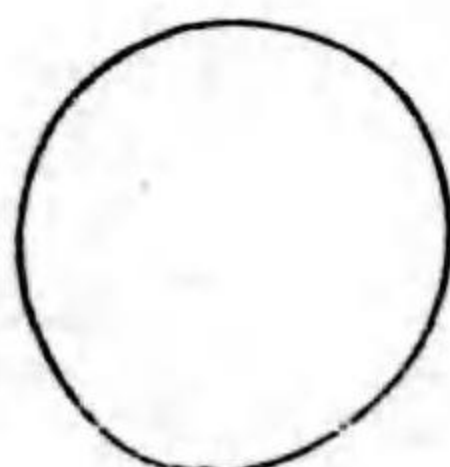
こ、猿を脊に引擔いで、小川へ連れて來ると、
 世猿にうんと御馳走をして食べさせました。
 界意地きたなの猿は、吾身のほども考へずに、
 お勧めらるゝにまかして、鯉鮒鰻に鱈から、お毒
 伽の長い鯰まで、うんとこさあと詰めこんで、こ
 嘶うさうしまひにお腹の皮がはじきれて、川獺の
 ところで死んで了ひました。

第十編

二人兄弟

附御恩返し

本書わ讀んで面白く、筆法平易流暢、少年
諸君に對して無二の好本なり、宜しく一日
も速かに、御購讀あらん事を希望致します。



終